

令和3年度石川県立美術館運営委員会 議事概要

1. 日時 令和3年6月2日(水) 午前10時00分～11時00分

2. 場所 石川県立美術館 会議室

3. 出席者

(委員)

市島委員、太田委員、得能委員、東委員、村井委員、山崎(光)委員、山崎(達)委員、
山崎(剛)委員

(美術館)

青柳館長、山本副館長、谷口副館長、新田総務課長、前多第一課長、寺川学芸第二課長、
村瀬文化財保存修復工房担当課長

4. 議事

(1) 令和2年度の美術館の運営状況について

(2) 令和3年度の運営計画等について

(3) その他

5. 議事概要

館長挨拶の後、令和2年度及び令和3年度の運営状況・計画について説明をした。その後、運営状況・計画の説明に対する質問や、今後の美術館の在り方や期待することなどを委員に発言してもらった。

(館長挨拶)

このようなコロナの大変厳しい状況の中でご参加頂いたことを心から感謝申し上げます。

この一年はまさにコロナに大きく振り回された一年間だった。

本来ならば2020年東京オリンピックが開催されるのに合わせて様々な大きな企画を考えていたが、順延せざるを得ない状況になり、そして昨年春に続いて現在はまた二度目の休館を余儀なくされている。昨年度予定していた大型企画展をこれから展覧していきたいとは考えているが、コロナの感染拡大状況次第である。できるだけ努力はしたいと考えている。

一方でご承知のとおり、昨年10月に国立工芸館が開館した。この地域が美術館と国立工芸館、それから生活工芸ミュージアム、金沢市立中村記念美術館などとあわせて石川の工芸王国としての存在というものを、日本だけでなく、東アジアにも発信できるような状況・体制が整ったのではないかと思う。

そういう中で一年延長されたが、2023年には国民文化祭が石川県で開催され、翌年に全県に新幹線が行き渡ることが予定されている。それに合わせながら、文化の石川県というものそして金沢を日本中に訴えていきたい。石川の文化の力を発揮することによって多くの方々に石川や金沢に来ていただくだけでなく、県民の方々にもその文化の豊かさのある地である石川あるい

は金沢に住むことに誇りを是非持っていただきたいと考えている。

このために今館を挙げて色々な想を練っている段階ではあるが、のちほど事務局の方から説明したいと思う。

是非、運営委員会の委員の方に様々なご意見やご指導を頂きたいと思います。

(委員)

休館しなければならないというような状況に置かれながらも、なにかそこでできることはないのかを考えているのは非常に素晴らしい。

美術館がウェブサイトを強く見直しているということだが、若い世代ほどスマホから全ての情報を取り入れているので、それを利用するというのもある。

(委員)

コロナの時代に入館者が思った以上に多かったと聞いて、大変喜んでいる。せっかくの展示が途中で中止になり、すごく残念である。動画配信もなるべく展覧会としての質とか思いが伝わるようなものがあってもいいかなと思う。企画展「加賀百万石文武の誉れ」は断然素晴らしい内容なのだが、日本人にとってもやや高度な内容で理解するのが難しいのではないかな。

外国語音声ガイドがあると思うが、特にこの展覧会において外国人のための工夫というようなものがあったら訊かせていただきたい。

また、『石川県立美術館だより』で「学芸室の人々」というのがいいなと思う。ひとの顔が見えるとはこういうことなのだなあと思う。こういう工夫を今後も続けていただけると大変ありがたいと思う。

(副館長)

確かに企画展「加賀百万石文武の誉れ」については、当初は外国の方を念頭においていたが、今の状況ではなかなか外国の方が観覧できない状況である。

外国語音声ガイドについては、コレクション展の方であり、企画展の方では十分な対応ができていないので、今後の検討課題にしたいと思う。

『石川県立美術館だより』をよく読んで頂いて大変ありがたい。「学芸室の人々」についてもこういう顔の人間がこうしたことをしているのですよというのが皆さんにもわかって頂けたらと思う。

(委員)

6月に入ってから北陸日彫展を開催させていただき、大変ありがたいと感謝している。

美術館の職員の皆さんは大変ご苦労されているのがわかり、コロナが早く収まってくれることを願っている。

(委員)

美術館のたくさんの所蔵品を活かしながら、近代美術館等あちこちから借りて立派な企画をされている。この前会期中で中止になった企画展「かお・すがた・こころ—肖像と近代—」これも大変良かったと思う。コロナの感染拡大のため突然中止になったが、いろんな動画を活かしてこの企画展を皆さんに知ってもらうのがよいかと思う。企画展「加賀百万石文武の誉れ」ですが、加賀藩の歴史をこうして展示することは私も大変魅力を感じている。若い方たちが頑張っている企画をされてうれしく思う。

(委員)

企画展「かお・すがた・こころ—肖像と近代—」の開会式に出席して、学芸員の方の話も聞いたが、本当に皆さんよく勉強しているなと思う。

学校の出前講座について資料には今年は9校予定と書いてある。子供たちに美術的な素養というか雰囲気とか素晴らしさを鑑賞させてあげたいと思うので、今後とも続けてほしいと思う。企画展「加賀百万石文武の誉れ」について、土佐日記と万葉集とかの古文書が展示されている。古文書が好きだが、やはり読めないものが沢山ある。一般の方にもわかりやすい解説を工夫してもらいたいと思う。

(委員)

大学も今コロナ渦の影響で、半分リアルで半分オンラインといろいろと苦労してやっている。便利さと大変さを経験しているのではないかと思う。大学も美術館も一緒ではないかと思う。アフターコロナには元の世界に戻るのとは違うのではないかと思う。最新の技術ICPとかも使って、今までとは違う美術館のファンを作っていく。リアルじゃない、オンラインを通じた県立美術館への観覧者を増やしていくことも頭の中に入れて、小学校にも普及に行き、バーチャルリアリティーみたいなものも使って結構リアルな感じで、美術館に来て実際に見るのと同じような映像を、学校に持って行って子供たちにかけて見せたりすることができる。今もこのオンラインの映像を見たが、もう少し内容を充実させてワクワクさせてほしいと思う。そのためには県に予算をつけてもらい、プロのテクニック技術を使わないとそういう世界に入り込めない。アフターコロナには、美術館も来館者をどういう形で獲得するかが課題である。リアルなところとバーチャルなところの両方みたいな世界がこれから出てくる。それは大学も同じで、別にキャンパスに来なくても単位を取れるというような世界になりつつある。同じことがいろいろなところで起こるのではないかと思う。

(委員)

兼六園周辺文化の森企画展等のことで冒頭に館長からお話がありましたが、これまでは1つ1つの館で自分のところで企画していればよかった。今の時点では美術館、歴史博物館、国立工芸館ということになっているが、計画にあたっては2年後3年後のシミュレーションの中で行われることになるだろう。私立や財団立や市立もある中で展覧会をするにあたって、これまではそれほどまでもなかったが、その辺の館同志のすり合わせというか打ち合わせや情報交換その辺のことについてお訊かせいただければと思う。

(副館長)

それでは事務的なところを説明します。

今ご指摘いただきましたが、今まではどちらかというそれぞれの館がそれぞれの企画を考えてやってきたというところがある。国立工芸館が隣にできて、この辺全体として21世紀美術館であるとか、そういう金沢市の美術館も含めてまさにそのエリア全体が兼六園周辺の文化の森と称している。大きな企画をやる時には少し前から、お互いどういうことを考えているか前広に色々と協議を重ねて、1つの絵に組み立てていくということがこれから必要だろうと思っている。そういったことを事務的に少しずつ始めている。

のちほど館長の方からお話申し上げたいと思います。

(委員)

自分は学芸員とか美術館とかかかわることが多かったので、その立場から意見を申し上げたい。賛否両論あると思うが、一つの意見としてお聞きいただきたいと思う。企画展のラインナップをみても確かに王道で、非常に地元根差した質の高いものだと認める。ただ何と云うか、純粹すぎて揺れがないという気がする。すべてが美術館主催の事業で、全国的に多くみられる大型巡回展とか複数館による共同主催会がない。バランスの問題で1つ

2つと注目されている大型展が回ってきて北陸のためにはいいのかなという気がする。というのはエリア的には北陸は巡回展が狙っている会場が愛知と競合になり、どうしても良い大型展が名古屋に取られているということがある。おそらく石川県金沢の地というのは富山よりは有利な条件になっていると思うので、当然レベルを見極め、学術的に本県として有益なものに限定し、注目される巡回展を持ってくるのも1つの手かなと思う。複数館の学芸員が協力して学芸員レベルから立ち上げる展覧会と、あと単館で企画する展覧会もあるといいのかなと思う。私自身が学芸員をしていた頃は、やはり学芸員の中で巡回展について賛否両論があった。巡回展はすごく自分のモチベーションを上げるのにプラスになっていたが、ただそれに対する批判も一方ではあり、どちらがいいのかということとは言えないと思う。

作品購入についてですが、伝統工芸展等をはじめとして審査に立ち会っているとその県のよい賞を得たものが、このあとどこに収まっていくのかすごく気になる。日本の公的機関がもう購入しないということを海外から見透かされているので、賞が決まった途端に、「この作品は外国の何々美術館にもう決まっています。」と言われたりする。それが昔で言うと、ジャポニズムの時代に美術品が海外に流出していた状況と非常によく似ていて辛いものがある。色々予算上の都合があるとは思いますが、作家の気持ちとして日本で頑張って評価が得られたものが、海外に流出するのは非常にちょっと勿体ない気もする。この館だけの問題ではないが、なんとかそれを公的なコレクションにいけるようなご準備をいただければと思う。

(副館長)

ありがとうございました。皆様方貴重なご提言ありがとうございます。それでは最後に皆様から頂いたご提言を含めまして館長ひとつお願いいたします。

(館長)

本日は色々ご意見頂きましてありがとうございます。

何人かの委員の先生方がコメントしてくださいましたが、5月11日までで終了した企画展「かお・すがた・こころ」は大変素晴らしい肖像に関する展覧会で、日本の近代化がよくわかる意味でも、当館だけやるのは勿体なくて巡回展にでも仕立てて日本をまわれば大変な人気が出たのではないかと考えている。宮本三郎とか裕伊之助とか、様々な石川にゆかりの素晴らしい作家がいるのだなということを感じた。

おそらく今まで加賀百万石前田家コレクション、工芸それから鴨居玲とかのこの美術館が財産にしている何年かに1回繰り返して行えるようなもののメニューの中にこの今回の「かお・すがた・こころ」のテーマも入ってくるのではないかと、つまり、これから継続的な財産になっていくのではないかとということで大変うれしく思っている。

この文化の森を中心とする美術館・博物館との連携であるが、これはきちんとやっていけば、おそらくベルリンのいわゆる博物館の島と呼ばれるものに相当するぐらいの充実した活動ができるのではないかと考えている。色々な館にお願いしながら連絡協議会みたいなものを作れば、内容的にもより充実した活動ができるのではないかと考えている。

もう少しITを活用したらどうかということは、実にご指摘のとおりである。その部分が決して充分には行えてないもどかしさがあるが、これはあのパンドラの箱のようなものである。大変予算もかかるものなので、事務局を中心として色々な補助金等を獲得してやっていこうという方針である。来年には少しそのことに関しても披露することができるかもしれないと思う。コロナ禍の制約のある中で、皆様のご協力やご指導で、それなりにきちんとした仕事できてきたのではないかとと思う。これに慢心することなく、これからも先生方に適切なご意見とご指

導を得ながら美術館としての活動を深めていきたい、拡大していきたいと考えている。どうぞ
よろしく願いいたします。

(総務課長)

本日は委員の皆様、貴重なご意見ありがとうございました。

特段ご意見等ございませんようでしたら、以上を持ちまして令和3年度石川県立美術館運営委
員会を終了いたします。

本日はどうもありがとうございました。

(副館長)

ありがとうございました。